

マンガの中の時間

—思想的視点から—

京都大学 銭廣承平

1. 目的

本報告の目的は、西洋近代と日本との美意識における差異を念頭に置きつつ（主観的にではなく）、マンガという、しばしば日本独特と評されるメディアが、われわれの時間意識にとっていかなる特性を持つのかを考察することにある。マンガの中に流れる時間がとる形態が、上記の比較文化的なテーマ・関心に理路を提供できるように、と。

2. 手段

これまでのマンガ研究のアプローチは概ね、「批評的方法」、「メディア論的方法」、「記号論的方法」、「美学・哲学的方法」などに分けられるだろう。それらは相互に排他的に、明確な線引きをもってなされるわけではなく、どこに重点が置かれるかという程度の差異だと思われる。量の話をするれば、マンガの作品それ自体の評論や、作品の傾向やそれを取りまく事象群から社会・時代の診断、という類が多く見られる。他のアプローチ、中でもメタな視点からマンガというメディアを捉えようとする研究になればなるほど数は少なくなるようだ。もっとも、この傾向はあらゆる領域で同じ事が言えるだろうが。

本報告はといえば、上述のような目的から「美学・哲学的」なアプローチが主、ということになるが、そのなかでも、時間意識についてのフランス現代思想から H・ベルクソン、G・ドゥルーズ等の論旨を中心に据えることになる。「哲学的」というワードは、殆どの場合誤解をもってしか受容されていないし、そもそも 20 世紀以降を考える上では、現代思想家は西洋哲学を解体しているという意味すら持ちうる。そのため本報告のアプローチは、西洋思想的な伝統を前提に、美学的な時間意識の構成の可能性をマンガから探る、と表現すべきだろう。また、多くの研究ではマンガとアニメの差異はあまり強調されずにいるが、本報告ではとりわけ、マンガと例えば映画とが持つ時間論的な差異が重要になる。

3. 結果・結論

考察の結果は次のようになる。マンガというものが独特のメディアであり、それはその時間構成の特異性に拠っていること。しかし、その特異性は、他の諸芸術に対して、例えば映画というメディアに対して、本質的な差異を持っているわけではない、ということ。それでもその程度の差異が、大衆文化としてのマンガというものにまで現れるという、見過ごすことの出来ない差異であること。その差異は暴力的に言ってしまうと、映画・アニメは外部環境に、象徴形式として時間的な作品を現出させること、それに比べてマンガというメディアは、身体の側に時間的なものを打ち立てさせる、ということである。

しかし、理論的な研究において重要なのは得られる結論としての単純な文字列ではない。そうではなく、そこまでの論理的過程とその思考の跡がもつ展開可能性である。